

いしMT15・TK10型式期という、畿内の土器製塩が減産し、備讃瀬戸がふたたび増産に転じる頃にあたるが、三河以東については、製塩の痕跡がみあたらないという（川西 2004）。塩の獲得という側面からも、首長層が結んでいた政治的関係の解明が期待される。（齋藤）

2. 権現山遺跡の堀と施設

囲郭施設 西第1・第2調査区で確認された南北に走る1号溝は、1号住居址を切っている。走行方向は詳細にはN-17°-Eをとる。断面形は逆台形を呈するが、覆土の特徴も新しい。昨年度の南東調査区の堀で確認された火山灰(榛名山二ツ岳噴出火山灰=Hr-FA)は見出せなかった。出土遺物も、中世陶磁器を含み、新しい。その1号溝とほぼ平行する2号溝も、N-16°30'-Eをとる。断面形が逆台形をなす。覆土も1号溝同様、FAを確認できなかった。これらは古墳時代中期の土器片も出土するが、中世の遺物も認められ、中世に下る可能性が高い。居館西辺の囲郭施設とは認めがたい。

昨年度の調査で確認した西辺柵列の布堀の北側延長線上にある西第2調査区で6号溝を確認した。それが北上して途中で止まり、その内側に1号溝が南下してきて止まる状況がうかがえた。あるいは両者がセットになって出入口施設を構成する可能性もあると考えたが、1号溝が新しいものという判断により、その説は成立しなくなった。また、その6号溝自体も柵列の布堀とすることに疑念がでてきた。

一方、北東第2調査区での北辺の堀の追求で確認された2号溝は、北東から南西にかけて直線的に延びている。一方、権現山遺跡4区のSD-143溝が北東から南西にかけて延びてきている。前者の上幅は146cm、底面幅は110cm、深さは70cmほどで、後者は上幅150cm、底面幅110~115cm、深さ33~54cmということで、やや深さに違いはあるが、今回の調査の北東第2調査区で確認された2号溝と一連のもの可能性が高い。断面形もおおよそ逆台形で似ている。2号溝で確認された上層のFAはSD-143溝で記載されていない点が気懸かりだが、FA下出土の土器が権現山SG1区編年2段階に相当し、時期的に矛盾はない。ちなみに、SD-143溝は出土遺物からSG1区で確認されていた居館遺構と関係するか、僅かに先行する可能性があるとしてされている（内山ほか2010）。2号溝と居館の堀とのFAとの関係、遺物の内部からの流入の様相などにも共通性がある。

3号溝は南東から北西に延びているように見え、居館北東コーナーからの居館の堀SD-95の延長と推定される。底面が平らで幅210cmと広く、浅い点は居館の堀との関連性としては微妙であるが、合流点で幅広になっている可能性がある。居館の北東辺の堀が3号溝に続き、さらにSD-143溝の延長線上の2号溝に合流するとみるのが妥当なところであろう。なお、2号溝に平行する柵列ピットの確実なものは確認できていない。

以上、北東部で約120度の鈍角に開くという異例の形態の豪族居館である権現山遺跡は、その堀が北西方向に続かず、急激にまた方向を変えて南西方向に延びることが明らかになった。北東部の形態は北に谷の入る自然地形に制約されているとも考えられる。

大型竪穴住居址 今回の調査の大きな成果の一つに大型竪穴住居址が確認されたことがあげられる。西第1調査区の1号竪穴住居址がそれで、一辺が8mを超える東西8.8m、南北8.7mの規模を有する。面積は約77㎡となる。この規模は古墳時代中期では大型クラスに属する。建物構造としては、4基の主柱穴に南東部の貯蔵穴を伴い、炉は中央より東に偏在する。過去の調査でこの権現山遺跡の古墳時代の竪穴住居址では炉の位置が竪穴中央よりも東側と北側に寄るものが多く確認されている（内山ほか2010）ので、似た様相ということになる。耕作の深耕により、床面をかるうじて残していたという状況でもあり、威信財は確認できなかった。出土遺物の土器では、甕・壺・罎・高坏・埴・坏などの土師器が一通り揃っており、一般的な生活器財から構成される。特殊な器種は認められず、須恵器や陶質土器も確認できなかった。1号住居址出土高坏は権現山遺跡4区SI-27出土のものと酷似し、出土遺物から権現山SG1区編年2段階の時期が推定される。時期は総じて居館が機能している権現山2段階~3段階を中心とする時期のものである。なお、南東隅に排水溝を付設すると推定される。

権現山遺跡の北部地区SG1区では7.38m×7.39mのSI-71の竪穴住居址が過去最大規模である。この住居はカマドをもち、5段階で同時期の存在ではない。権現山遺跡周辺では、杉村遺跡GN1区SI5竪穴住居址が9.29m×9.48mの規模をもち、大型住居だが、時期はこちらも権現山5段階に下る。すると、居館の時期では今回確認された1号住居址が最大級ということになる。

栃木県内の豪族居館では矢板市堀越遺跡（栃木県教委ほか2005）において8.6m×8.9mの、さくら市四斗蒔遺跡（橋本ほか2000）の1号居館において7.4m×8mの各々大型竪穴住居址を検出している。いずれも古墳時代前期のものである。福島県いわき市菅俣B・折返A遺跡（いわき市教委2003）の同じく古墳時代前期の豪族居館では一辺10.5mの大型竪穴住居址が認められている。権現山遺跡とやや近い時期の古墳時代中期末の豪族居館、群馬県高崎市北谷遺跡（若狭2006）からは一辺13mの大型竪穴住居址が検出されている。現在確認されている列島最大級の豪族居館、後期の群馬県伊勢崎市原之城遺跡（中澤1985）においては一辺12.7mの大型竪穴住居址の存在が知られている。

このように、大型竪穴住居址が豪族居館の内部に存在する一方で、居館の囲郭施設を確認できずに存在する大型竪穴住居址がみられる。中には、一般集落内に大型竪穴住居址の点在する例も認められる。今後、権現山遺跡1号住居址が居館とどのような関係にあるのかを解明することが課題となった。

また、西第2調査区では2号住居址が発見された。残念ながら調査区の西辺に住居址の東辺がかるうじて確認されたもので、北東角と南東角が検出され、一辺が7.1mと1号住居址に比べれば相対的に小さいが、比較的規模が大きいものである。北東角周辺からは貯蔵穴が見出され、その西隣の調査区外住居址北辺の中央あたりに竈が存在すると推定される。貯蔵穴内の出土遺物からは6世紀後葉～末葉に比定される権現山SG1区編年6～7段階の時期が想定される。器種は甕・坏・高坏などである。时期的には直接居館とは関わらないが、断続的にこの空間を居住の場に使用していたことが分かった。主軸はN-7°-Eをとる。

掘立柱建物址 調査日程最終日に確認された西第3調査区の南東隅の3間×3間の掘立柱建物址は、長軸6.8m、短軸5.7m、面積38.76㎡を有する。主軸がN-約21°-Eをとり、居館東辺の溝および柵列とは平行な関係にはならない。ピットの覆土の様相は西第1調査区1号住居址の覆土や南東辺の溝の覆土とも類似し、古墳時代中期のものとして問題はない。むしろ、周辺に他の時期の遺構や遺物がほとんど確認されていないところをみると、居館の時期のものともみえず間違いなさそうである。問題は、この遺構が居館の全体の中でどのような場所に位置するのかという点である。すなわち、居館の内部なのか外部なのかということである。さらに、この掘立柱建物址の性格が問題となる。南北に長い3間×3間で側柱以外に、内部に6号ピット、7号ピットの柱穴が長軸方向に入る。7号ピットは全体のほぼ中央に位置し、柱痕の直径こそ30cmと太いが、ボーリングデータではあるものの、深さは意外に浅く、18.5cmしかない。屋内棟持ち柱とするには浅すぎる。6号ピットは柱痕の直径が22cmと細く、さらに深さは13.5cmと浅い。よって、床束柱の可能性が高い。7号ピットに対する6号ピットの反対側である南側の主軸上の位置には柱穴を検出できなかったが、あるいは浅い床束柱の柱根を受けるピットがあった可能性も捨てきれない。古墳時代の倉庫としては、弥生時代以来の小型の1間×2間や2間×2間のもの以外に地方大型居館の2間×3間（原之城遺跡）、中央大型倉庫群の4間×4間（鳴滝遺跡）、5間×5間（法円坂遺跡）などがあり、これらはほぼ総柱を基本とする。その点、権現山遺跡のこの建物址は微妙である。群在性という点からも居館の全容が分からない段階ではあるが、可能性は低いと推定される。

なお、権現山遺跡では以前の調査で、北東コーナー付近の内部に6間×5間、ないしは6間×6間の北辺に庇の付く大型の掘立柱建物址と南東コーナー付近内部に2間×2間の掘立柱建物址が確認されている。前者は屋内棟持ち柱を伴うらしい。後者は側柱建物である。東辺中央付近内部にも掘立柱建物址の存在する可能性がある。内部には相当数の掘立柱建物址が存在することが想定される。

長方形土坑 長方形土坑は西第1・第2調査区の西側に集中する傾向がある。主軸は略南北方向をとるものが圧倒的に多い。僅かながら、2基それと直交する略東西方向のものがみられるが、切り合

い関係では、新しい。角度はN-19°~25°-E近くで、西第1・第2調査区の1号・2号溝とほぼ平行する。長方形土坑の溝との切り合い関係は唯一、西第2調査区の13号土坑で認められ、13号土坑が1号溝に切られている。なお、長方形土坑どうしの切り合い関係は、西第1調査区の2号土坑の西辺が調査区外にあるので、確実に長方形土坑になるか不確実ではあるが、2号土坑が1号土坑を切るかたちとなっている。他には、南側の西第2調査区で16号土坑から19号土坑までが近接し、一部重複して構築されている。おそらく近い時期に営まれたのであろう。形態の上では、角が隅丸のものと、角張っているものがあり、長幅比が大きい細長のものと長幅比が小さいずんぐりしたものがある。総じて北側の辺が南側の辺よりも長くなる傾向がある。深さは確認面から深いもので西第2調査区の18号土坑の40cm、浅いもので、西第1調査区の4号土坑の8cm程度で、平均で約26cmとなる。ちなみに、深さが71cmと極端に深い西第2調査区7号土坑は長方形土坑にはならないと推断される。断面形は一部しか発掘していないので全てに共通するか否か不明ではあるものの、底面の明らかになっているものは舟底形である。大きさは、150~356cmまでのばらつきがある。分布からして計画的な配置は認められない。出土遺物は混入の土器片以外に殆どみられない。これらからして、長方形土坑の性格は、農業用のイモ穴の可能性もあるが、土坑墓の疑いもある。時期は、覆土の様相から最近のものとは言えない。切り合い関係から、西第1調査区1号住居址を切る5号土坑より判断して古墳時代中期以降で、1号溝に切られている1基を評価すれば1号溝以前か、それを前後する時期としても矛盾はない。

なお、同様な長方形土坑が確認されている中、同遺跡SG1区SK-128が注目される。その南北軸をとる土坑の北寄りから鍍金銀板で銅芯を覆ったとされる耳環が1対出土している(内山ほか2010)。この長方形土坑に関しては全リン酸含量分析が行われているが、同一土坑中の2層の土壌サンプルに大きな変化は認められなかった。しかし、土坑墓とみるのが自然であろう。ちなみに、大きさは長さ138cm、幅32cmを有する、すると、この種の長方形土坑には古墳時代後期の土坑墓の含まれることが推定される。また、先の調査で「時期不明の土坑」として報告されたうち、他の遺構との切り合い関係から時期がしぼられる長方形土坑が存在する。その中で権現山遺跡SG1区のSK-21、SK-22は古墳時代後期のSI-71よりも新しく「近代以降の農業関連土坑(イモ穴)か、または中世のものか」としている(内山ほか2010)。しかし、古墳時代後期の中での切り合いという可能性も残されている。また、中には中世の井戸を切るもの、中世の溝に切られる可能性のあるものも存在し、全てを古墳時代後期のもの、あるいは近代以降のものとするのも躊躇せざるを得ない。用途としても、長軸2mを優に超えるような長いものは墓ではない可能性が高い。

その他の土坑 西第1調査区の3号土坑は2.4m×2.4mの正方形を呈し、また性格を異にする遺構と考えられる。1号住居址との切り合い関係はないが近接し、軸を等しくする点で同時存在の可能性も考えられるが、近すぎる感がある。柱穴・火処を欠き、住居址ではないだろう。時期は出土遺物が少量ではあるものの、古墳時代に遡る可能性はある。

おわりに—今後の課題— 当初予定していた付近南方のSG5区の確認調査は、今回、時間的制約もあり、断念した。また、居館の全貌を明らかにするためには、北東辺から曲がって延びる溝の南西側への延びを追及する必要性があり、北東区に接する中央部の発掘調査が不可欠となった。今後の研究の進展は、土地所有者の格段のご協力をまたざるを得ない。

今回の調査に当たっては、地元、土地所有者の皆さん、東谷地区・茂原地区公民館関係者をはじめ、宇都宮市教育委員会、栃木県教育委員会、財団法人とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター等の諸機関・諸氏のお世話になった。今後とも、変わらぬご支援・ご協力をお願いしたい。(橋本)

註

西調査区は調査面積が広大であり、第1調査区から第3調査区までの3つの調査区ごとに調査をおこなったため、調査時点での遺構、トレンチの呼称が不統一であった。また調査の結果、一部の遺構の認識に誤りがあったことが判明したため、報告にあたって調査時点での呼称を以下のように変更した。

第9表 附表

調査時	本報告	調査時	本報告	調査時	本報告
1区1～4トレンチ	第1～4トレンチ	1区2号住居	1号住居址	1区1・3号土坑	1・3号土坑
1区3号土坑・4号溝セクション	第5トレンチ	2区3号住居	2号住居址	1区2号土坑	5号土坑
1区2号住居排水溝セクション	第6トレンチ	1区1・2号溝	1・2号溝	1区4号土坑	6号土坑
2区1・2トレンチ	第7・8トレンチ	2区1・2号溝	1・2号溝	2区3号溝	5号溝
2区3号溝セクション	第9トレンチ	1区3号溝	4号土坑	2区布掘り溝	6号溝
2区3号土坑	第10トレンチ	1区4号溝	3号溝	2区1～3号土坑	7～9号土坑
2区布掘り溝セクション	第11トレンチ	1区5号溝	なし	3区1号溝	7号溝
3区1号溝セクション	第12トレンチ	1区2号住居排水溝	4号溝	3区1号土坑	22号土坑

引用・参考文献

- 安久津純 1976「地形」『栃木県史』資料編考古1 栃木県 3～8頁
- 安達俊一ほか 2011『新潟大学考古学研究室調査報告』第11号 新潟大学人文学部
- いわき市教育委員会 2003『いわき市埋蔵文化財調査報告第95冊 折返A遺跡・菅俣B遺跡 第2分冊』
- 鐘方正樹 2003『井戸の考古学』同成社
- 川西宏幸 2004『同型鏡とワカタケル—古墳時代国家論の再構築—』同成社
- 内山敏行・後藤信祐・谷中 隆・亀田幸久・大澤正己・穴澤義功 2010『東谷・中島地区遺跡群10—都市再生機構による東谷・中島土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査—』栃木県教育委員会・とちぎ生涯学習文化財団
- 栃木県教育委員会・とちぎ生涯学習文化財団 2005『栃木県埋蔵文化財調査報告書287 堀越遺跡』
- 中澤貞治 1985『原之城遺跡—古墳時代の環濠跡—』伊勢崎市教育委員会
- 橋本博文ほか 2000『古墳時代における首長層の居館と奥津城の関連性に関する研究』課題番号：09610403号、平成9年度～平成11年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（2））研究成果報告書
- 若狭 徹 2006「古墳時代における地域首長の政治領域」『考古学雑誌』第90巻：85—110頁 日本考古学会